2026_1004「秋の北極圏旅行記（19)」日々の理科 4438 号

「湖面に反映する秋のオーロラ」

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

旅行には、かならずクライマックスがあります。長い旅の途中で、ふと「この瞬間のために、ここまで来たのだ」と思える時です。今回の北極圏旅行でそれを感じたのは、このオーロラを目の前にした時でした。北極圏の短い秋、湖はまだ氷に閉ざされていません。静まり返った夜空を横切る緑の光が、鏡のような湖面にも映り込み、空と水の両方にオーロラが広がりました。

私が初めて北極圏を訪れたのは 1995 年です。それ以来 30 年以上、いつか見てみたいと思い続けてきたのが、まだ凍らない湖に映るオーロラでした。写真では何度も見てきましたが、自分の目の前で空の光と湖面の光が一つの風景になる瞬間は、想像していたものとは違いました。しかも今回は私一人ではなく、同行者も一緒に、湖面に映る幻想的な光を確かに肉眼で見ることができました。

人が何かに感動することは、それほど難しいことではありません。美しい風景の中に立てば、言葉を失うほど心を動かされることがあります。しかし、その時に自分が見たもの、感じたものを、そこにいなかった人へ伝えることはとても難しいものです。写真にも、あの夜の静けさや冷たい空気、そして光が水面に現れた瞬間の驚きまでは写りません。それでも、この一枚を見てくださった方々に、私たちが北極圏の湖畔で味わった感動が少しでも伝わったなら、これほど嬉しいことはありません。

（2026 年 9 月中旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／現地で撮影）

